

特248

958

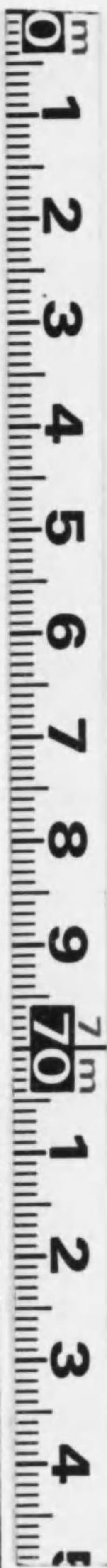
金 牧野元次郎著

人生金儲け修業

—金の貯め方・使ひ方—

十錢

版社題問の日今



始



特248
958

人生金儲け修行

牧野元次郎著

今日の問題社版



今日の問題社

目次

金の性質……………(七)

- 1、金とは何か……………(七)
- 2、拜金宗の本義……………(八)
- 3、金の勢力……………(九)
- 4、人多くは金の奴隷なり……………(一〇)

金に對する人の覺悟……………(一〇)

- 1、金に執着すべからず……………(一〇)
- 2、經濟的に散金すべし……………(一一)
- 3、慈惠的の散金……………(一二)

金儲けの秘訣……………(一三)

- 1、金儲けにも巧拙あり……………(一三)

- 2、金儲け第一の秘訣……………(一四)
- 3、金儲け第二の秘訣……………(一五)
- 4、金儲け第三の秘訣……………(一七)
- 5、金儲け第四の秘訣……………(二)
- 6、金儲けの心得……………(三五)

貸 金 法……………(三)

何故貯金せねばならぬか……………(三四)

三ツ割生活法……………(三六)

貯金の三徳……………(四)

- 1、貯金の幸福……………(四二)
- 2、貯金をすれば身體健康……………(四三)
- 3、貯金をすれば家庭圓滿……………(四四)
- 4、貯金をすれば商賣繁昌……………(四五)

どうすれば貯金が出来るか……………(四六)

- 1、消極的貯金法……………(四六)
- 2、積極的貯金法……………(四八)

眞の生活程度とは……………(四九)

貯金に時無し……………(五)

貯金に必要な三條件……………(五)

- 1、驚くべき貯金の積数……………(五七)
- 2、石の上にも三年……………(六一)
- 3、利殖としての貯金……………(六三)

最後は實行……………(六五)

人生金儲け修業

牧野元次郎

一、金の性質

1 金とは何か

朝から晩まで、金のために苦勞してゐる人間であれば、「金とは何か」といふ簡単な疑問に對して、明答を與へることが出来るであらう。いま試みに、これを學理的に説明すれば、

「金とは通貨の總稱にして富財の一也」
ともいへるであらう。世人の多くは、金と富財とを混同して、金の外に富財の存することを

知らず、富財は金より外になしと考へてゐるものがあるが、それは誤りである。

2 拜金宗の本義

金は世人が争ふて、大いに貯へんとするものであるが、その巧拙によつて非常なる差がある。貯金の巧なることを楽しんで金を集める人は、よく拜金宗の本義を解するものといへる。世の中で何が一番快樂みかといふに、人の出来ないことを成した時の快樂である。何事でも其成功した結果を樂まずして、成功を見るに至つた所以を樂しむべきである。端艇競争に勝負を争ふ人は、メダルを得んと欲するのではなくして、そのメダルを得るに至る勝利を欲するのである。得たメダルは人に與へてもよい、たゞ其メダルを得たる勝利を樂しむべきである。金を集め得たる成功を樂しんで、決して其得たる金に執着してはならぬ。集めた金は人に與へてもよい、たゞ其集め得た成功を喜ぶべきである。

然るに、世には拜金宗の本義を誤解して、俗にいふ守銭奴なるものが多い。これは拜金宗の信者であると同時に、其賊である。彼等は、金を集め得た勝利と成功とを樂しますして、集つた金にのみ向つて樂しむもので、金に執着して終生金の奴隸となるものである。かゝる輩の集

めた金を稱して、死金といつて、世に益する所がない。

3 金の勢力

金を稱して「萬能の神」といふ位であるから、その勢力の偉大なることが判るであらう。金は權利であり、生命であつて、金がなかつたら、この世に立ち難い。

かくいへば、人はいふであらう。「學者は貧困の門より出づ」と。しかるに豈はからんや、金がなかつたら、文明教育の一片さへ受けることが出来ない。たゞに教育ばかりではない、すべての物、すべての事、いかに世は進歩し、發達したとするも、文明の光は金なき人の頭上を照らさず、文明の恩澤は貧困者には霑はない。

また人は言ふ。「醫は仁術なり」と。しかるに金なき人のためには、少しも仁術の惠を受くることが能はず、凡そ如何なる發明、如何なる進歩も金なき人のためには、何物もたらされない。金がなかつたなら文明の餘澤を受ることが出来ないし、生命を保つことも出来ない。あゝ何ぞ、それ金の勢力の偉大なるか。

4 人多くは金の奴隷なり

金の勢力は偉大なもので、人はみな其前に低頭平身し、金の願指に従ひ、東奔西走を辭せない。もしそれ、金の願指に従はず、亭々として天に嘯くものがあるとすれば、それは少くも狂人でなければ、偉人といふべきである。

偉人は世に甚だ稀である。たゞ似て非なる偉人は、しばしば之を認めるが、其心事は一段と卑むべきものである。

一、金に對する人の覺悟

1 金に執着すべからず

人間萬事金の世の中、浮世の義理としても、金に縁を絶つことは出来ない。この金に向つて人の知るべき覺悟を擧ぐれば左の如し。

第一、經濟的に金を集めること。

第二、集め得たる其金に執着すべからざること。

第三、たゞ其成功を樂しむこと。

第四、經濟的と慈惠的とに散金すべきこと。

經濟的に金を集めることは、かの吝嗇家の貯金とはちがふ。人の盡すべき義務を盡し、人のそぐべき涙をそぐ、正理正道を踏んで我慾を張らず、凡そ、人として享くべき相當の娛樂は、敢て求めて人後に立たず、悠々その所を樂しんで、徒らに心を苦しませず、而して、たゞ人に勝れたる才力と忍耐とを以て、自然に來る富を受くべきである。

かの營々として、金の外に何の趣味も解せず、人並外れて粗衣惡食し、目には一點の涙をもたへず、爪に火を燈して金を集め、それを以て人生の樂しみとするものがあるが、その心事の陋劣なること、此上ない。畢竟、この輩は、天地の大と自然の美とを解せず、人間の一生は朝露と壽を同じうするといふことを知らないものである。憫むべきである。

人は皆が皆、汲々として集金に勤めてゐるが、まづ自分が最初に、その目的を達して、澤山の金を儲けた場合、人に勝れたるその才智と、技倆とを喜び、そうして、その成功を樂しむべきで、決して其の集めた金に執着心を持つてはならない。集め得た金は、まづ經濟的と慈惠的

なものに分けて散金しなければならぬ。さすれば、その結果は積善の家に餘慶あるが如くまた自然に金の集まるものである。集散常なく、しかして恒ありといふやうに、金は夜盡き盡き來り、盡き盡き夜來るといつたやうなものである。だから、金といふものは終局がないといつても、かうした金の使ひ方、金に對するよき考へ方を持つてゐる者は、常に富の圓滿を得ることが出来る。

2 經濟的に散金すべし

いま、こゝで經濟的に散金すべしといふのは、俗にいふ無駄に金を費やさないといふことである。金を投じて、四谷街道を修築した鹽原多助の行爲の如き、金を投じて不毛の野に鐵路を敷設し、以て物産の増進を計るが如き、金を投じてドックを修築し、以て貿易の繁榮を計るが如き、金を投じて校舎を新築し、以て人材を養成するが如き、金を投じて不毛の地を開墾し、以て國益を増殖せしめんとするが如きことである。

要するに、將來の効果を以て投金するのを、經濟的な散金法といふのである。經濟的に散金するものは、その家は榮え、その國は強くなる。

3 慈惠的の散金

慈惠的の散金といふのは、鰥寡孤獨の不幸者を救助するがために金銭を投ずるといつた、慈惠的な事業に放金することである。もし、富める人で、世の中の不運な人々を憫み救ふ慈心があつたならば、虚無黨などと云ふものは起らない筈である。世の中は平靜に、四海浪穩かであることが出来る。人を救ふことは人のためではなく、つまりは、わが身のためであると思はなければならぬ。

三、金儲けの秘訣

1 金儲けにも巧拙あり

何事にも、上手と下手との區別があり、その差は天と地との如き大きな差がある。たとへば圍碁についても、本因坊のやうな名人もあれば、その本因坊に井目を置き、また、その人に井目風鈴つきでも叶はない人もある。其の階段等級は、非常に異なる者が多いのである。

この圍碁のやうな一小局面の上においてすら、かれ一石を置き、われ亦一石を置くにも拘はらず、その結果においては、このやうな雲泥の相違があるのであるから、まして、この社會に立つて各々が輸贏を争ふもの、その巧拙豈圍碁の比ならんやである。即ち舞臺は廣いし、役者は多い。千變萬化、虚々實々、誠に以て好觀物といふべきである。

金儲けの上手なものにロスチャイルドの如きがあり、バンダービルドの如きがあり、紀文大盡の如きがあり、河村瑞軒の如きがあり、その他新しい時代に至つては、淺野總一郎、安田善次郎、大倉喜八郎、古河市兵衛等があつたが、これ等は何れも空手にして皆産を興した人達であつて、實に一世の人傑といふべきである。その間に、何か秘訣がある筈である。

我も人も、日夜金儲けのためには肝膽をくだいて、金儲けに抜目がない。所が、その中には巨萬の富を重ねるものもあれば、また囊中無一物の貧的なものもあるのであつて、共にこれが金儲けのために心を苦しませてゐるのであるが、しかし、その差は、このやうに大きいのである。その間に、何か秘訣がなくてはならぬ。

2 金儲け第一の秘訣

金儲けの第一秘訣は、まづ身體を健康にすることである。健全なる身心は金儲け第一の基礎である。

昔の貧的、今の長者といはれる人が、大概身體の健剛であるのを見ても判る所である。身體が健全でなかつたならば、勇氣が出ないし、またこの荒浪の社會に立つて、人と輸贏を争ふことは、到底困難しいことである。たとへ争つたとしても、常に敗北を取ることは火を見るよりも明かなことである。

身體が健全であることは、心の勇剛を意味するものである。心が勇剛でなければ、この世に立つことは出来ない。社會は我利々々の者の集合體であるから、心が弱くては、その生命を保つことすら困難である。まして、商戰場裡の「チャンピオン」たることは一層困難である。

多病を誇つた才子的時代は、既に過ぎ去つて、今は實力を闘はず時世に變つたのであるから、最も健全なる身心を有する人が要望せられる。勇氣と忍耐と機敏とは、みな健全なる身體に、やどるものであるといふことを知らなくてはならない。

3 金儲け第二の秘訣

金儲け第二の秘訣は世の中を廣く見ることである。今は昔と違ひ、千里も一里といつた世の中であるから、一局部にのみ眼を注いで、大局を忘れるやうなことがあつてはならない。たとへば、圍碁に於てもその通りである。一局部の勝敗のみに眼を曝してゐて、全局について遠観する明がなかつたら、たとへ一局部に於ては勝利を得ても、大局に於ては必ず失敗を招くものである。

人事もこれと同じことである。一小天地の一瑣事にのみあくせくしてゐると、社會の進運に伴はずして、終生小利に勝ち大利を博する機会を失つてしまふ。これは憫むべきことである。世は日一日と進歩して、昨日物識りであつたものも、今日の物識りではないといふ時勢であるから、世の進歩に遅れず、文明の新事物に遭つて驚くことなく、よくその妙味をかみくだいて、その利益を利用することを怠つてはならない。廣く世の中を觀て、其の進運に伴ふものは即ち金儲けの上手なものである。

宇宙は大であり、天地は廣大無邊、文運の進歩は長足である。大局に眼を注いで、世界のどこで闘つても、力量に於て、敢て不足のないやうに覺悟しなければならぬ。一地方に於ては小利を博し得ても、廣い世界に於て輸贏をだに争ふことの出来ないやうな人物は、今の世の中

では共に語るに足らない。こういふやからを稱して、俗に商界の不具者といふ。

世の進歩に遅れず、世界の到る處に於て、世界の人を相手に勝敗を争ふものは、眞に商戰場裡の勇者であるといふことが出来る。

4 金儲け第三の秘訣

第三の秘訣は、社會的な知識を多く藏蓄することである。知識は金を生む母であると知らなければならぬ。悲しいことであるが、吾々は金のために二六時中離離する我利々々連の組織にかゝる、この不完全なる社會に棲んでゐる。世界の荒き所は、人情反覆の内にありと悟らなければならぬ。この人情反覆の間に處して、泰然として動かす、毅然として、その難所を切り抜けんとするには、まづこの人間世界の妙じき組織と、不道理なる作用と感觸とを窮めなくてはならない。人の悲しむ心も、笑ふ心も、喜ぶ心も、一見して其の奥底までも會得するといつた神通眼がなくてはならない。單純なる思想と一片の道理とは、しばしば人情と衝突して、常に失敗を招く根本となるものである。若い者の最初の失敗などは、この最もよき見本であるといふことが出来る。

東西南北もわからず、歸るのにも往くのにも路がわからず、唯々其の岐路に彷徨するやうなものであつて、實に憫むべきことである。また、喩へていへば、恰も闇夜に提灯を持たずに路を行くやうなもので、鼻を掴まゝれるのも判らず、手探りで一步々を進めてゆくうちに、遂に溝に落ち込んで大怪我を招くやうなものである。實に愚といふべきである。また、敵國と戦を始めやうとするには、まづ敵國の人情風俗、地理等について、これを辨へて置く必要があるのと同じことであつて、すべて、この世に立つて勝敗を争はんとする程の者ならば、人事に關する一般の法則を辨へて、少しでも拔りがあつてはならない。これは、たゞ人のために過まらない用意であるばかりではなく、自分の生命財産を保護する上の最要の利器と云ふべきである。その利は、護身刀やピストル以上である。

社會に存する諸種の機關と、組織と其の運用法とを知つて置かなければならぬことは何人でも異議を唱へないところである。然るに、案外世間といふものは愚かなものであつて、世の進歩に伴はないで新規の事物を解得してゐない人が甚だ多い。社會自然の力によつて、漸く新事物を知るやうになるのが普通であつて、進んで其の由來と作用とを研究して、他日の計に資しやうとするものは、まづ少い。かやうな人の心得では、世界の全局に立つて世界の人と輸贏を

まづ、人といふものに就て研究することが大切である。彼の笑ふのは、その心底におかしいことがあつて笑ふのか、それともおかしくなくとも、心に或る一種の野心を以て笑ふものであるかを知る必要がある。また、彼の喜ぶのは心から喜ばしいことがあつて喜ぶものと、喜ばしいことがなくても自分の外形を飾るために喜ぶものとがある。或は、彼の悲しみも果して眞實の悲しみであるか、心には喜んで、世間へのおせじのために悲しむものもある。かうした其の表裏の反目は人情の常である。それを知らずして眞面目に世事を觀察したならば、失敗續きを來すものである。

次には、社會といふものに就て研究することである。社會の進歩は複雑を意味するものであつて、進歩した社會は複雑な社會といふことが出来る。この進歩した複雑な社會に、いやしくも輸贏を争はんとする程の者は、まづ社會に存する規則と機關と、運用の方法を知らなくてはならない。所が世の中には、これをよく知つた人といふものは尠いものである。これでは、どうして世の勝利者たることが出来る。

そればかりではなく、社會の規則を知らなかつたならば、社會の人となることは出来ない。社會の規則を知らないで、この世に生存する人は、丁度地理不案内の土地を歩くやうなもので

争ふなどといふことは、とんでもないことである。近い将来には、自分の東隣に佛蘭西人が住み、其の西隣には露人が住むといった時代が来るかも知れないから、物事を深く考へて後に悔むことのないやうに注意しなければならない。

社會に存する諸種の機關について知らない者は、丁度汽車汽船の便があるのを知らないで、昔のやうに駕に乗つて道中をするやうなものである。社會に存する諸種の組織を解しない者はたとへば、大阪に送金せんとするに今の郵便を知らないで、危険な思をしながら、舊來の飛脚に托するやうなものである。それ等は、實に愚なことゝいはなければならぬ。また、不可抗力の危険、即ち天災地變等の禍難を防ぐために、保険といふ方法があることを知らないで、たゞ天運にまかせてゐる馬鹿者もある。これも愚なことである。

われ／＼は、かゝる社會に存する諸種の機關と組織とを了解し、かつ、これを運用する方法を熟知することを怠つてはならない。しかしして萬事を擧げて自動的に行ななければならぬ。自動といふことは成功を意味する。すべての成功の如何は、自動に隨伴するものであるから、其の間の事情をよく心得て、率先して社會の機關を運用する概がなくてはならない。考へて見ると、社會に存する諸機關の組織と運用法を知らないで、常に他動的に動くものは、いつも人

後に落ちて、一生涯浮ぶ瀬がない。かやうな者を、私は商界の盲目者といつてゐる。

5 金儲け第四の秘訣

更に金儲けの秘訣として最も大切なことは、時間と努力とを空費しないといふことである。時間と努力とは金錢を意味するもので、時間と努力とを空費することは、即ち金錢を無益に費すのと同じである。ところが、金錢を浪費することは誰でもきらふが、この時間と努力とを空費することは左程念頭に置かない。これは、時間と努力とが金錢と同様に尊いものであるといふことを辨へないからである。

時間と努力とは、金錢を生む母であつて、金錢は時間と努力との子供であるといふことが出来る。子供を得ようとするには、まづ其の母たるものを求めなくてはならない。そして其の母たる時間と努力とは一定の限りあるものであるから、ウカ／＼してゐると、捕まへることが出来ない。だから、力めて時間と努力とは捉らへるやうにしなければならぬ。

人間の一生は、朝の露と同じやうなものである。幸にして、人生五十年といふ定命を保つたとしても、この短い年月では、なか／＼何も出来るものではない。だからといつて、事の成ら

ないのを以て、單にこの短い月日のためであるとしてはならない。天地の長久なことから打算すれば、人生の五十年は誠に短いものである。しかし、よく考へて見よ、およそ人のやる事業でどんな事業でも、この五十年の月日をもつてしは成就出来ないといふものがあるか。もし、五十年の歳月を費して、事をなすに足らないとすれば、それはたとへ、千萬年の歳月があつたとしても、其の事業は成就するものではない。

長命した人が、自分の過去をふり返つて見ると、其の一生は茫として夢のやうなもので、しかも遂に何事も成就しなかつたことを悟るのみであらう。だが、先づ試に過ぎた昔を考へて見よ、自分の一生が、如何に無益なことのみに費した時間と努力との多かつたことを思ひ出すであらう。無駄に費した時間と努力とは、自分の一生の大半を占めてゐることを悟るであらう。だから、これが自分の一生は短かつたと思ふ所以であつて、これが即ち自分の一生に何事をも成就しなかつた所以である。

試みに、一日の中に空費する時間が、どんなに多いかを計算して見よ、何んでも、一日に五時間以上（この貴き、この大切なる、一度過ぎては歸らざるこの時間）を空費しない者は稀であらう。一日の中、無駄に費す時間が五時間位で済めば、まだしも其の人は勉強家の方である。

相當の食事時間、休息时间、安眠時間は別に空費した時間とはいはない、これは自己の生命を保つ上に必要な時間であるからだ。私が一日の中に、五時間以上も時間を空費することがあるといふのは、それは労働すべき時間中に存してゐるといふことである。

胸に手をあて、まづ一日中に成した事を考へて見よ、友人と空談のために費した時間はなにか、何の効果もない事に費した努力はないか、妄想のために思ひを焦した時間はないか。大いにあることに氣付くであらう。私は今假りに、大まけにまけて、一日の無駄時間を五時間とすると、一年間の總無駄時間は一千八百二十五時間となり、また人生五十年間の無駄時間を計算して見ると、驚く勿れ實に九萬一千二百五十時間となる。今、これを日數に直すと、三千八百二日となり、年に直すと約十四年半となるのであつて、人間が一生に空費する時間は實に大きなものである。而してこの十四年の空費時間は、全く労働し得る時間であるから、この時間を有効に使用したならば、如何なる事も出来ないといふことはない。成功は、手に唾をして期すべきである。事の成らざるを以て、單に短日月のためであるなどといふ者は横着者である。

十四年の全き労働時間を得ようとするには、少くとも三十六年の星霜を経過しなければならぬ。その理由は、いま假りに一日の労働時間を八時間と定めて計算したものである。だから

ないのを以て、單にこの短い月日のためであるとしてはならない。天地の長久なことから打算すれば、人生の五十年は誠に短いものである。しかし、よく考へて見よ、およそ人のやる事業でどんな事業でも、この五十年の月日をもつてしは成就出来ないといふものがあるか。もし、五十年の歳月を費して、事をなすに足らないとすれば、それはたとへ、千萬年の歳月があつたとしても、其の事業は成就するものではない。

長命した人が、自分の過去をふり返つて見ると、其の一生は茫として夢のやうなもので、しかも遂に何事も成就しなかつたことを悟るのみであらう。だが、先づ試に過ぎた昔を考へて見よ、自分の一生が、如何に無益なことのみに費した時間と努力との多かつたことを思ひ出すであらう。無駄に費した時間と努力とは、自分の一生の大半を占めてゐることを悟るであらう。だから、これが自分の一生は短かつたと思ふ所以であつて、これが即ち自分の一生に何事をも成就しなかつた所以である。

試みに、一日の中に空費する時間が、どんなに多いかを計算して見よ、何んでも、一日に五時間以上（この貴き、この大切なる、一度過ぎては歸らざるこの時間）を空費しない者は稀であらう。一日の中、無駄に費す時間が五時間位で済めば、まだしも其の人は勉強家の方である。

勉強する人は不勉強の人よりも、總じて三十六年の長命をしたのと同じ勘定になるのである。これは實に愉快なことではないだらうか。

この計算から推して見ると、人生は徒らに長命するばかりが能ではない。要は、たゞ時間を空費しないのにある。人は生れてから一分間たりとも無益に費さないで、能く力めたならば、たとへ、不幸短命で三十年にして死んだとしても、その成した事業は、普通の人の五十年間に成した事業と少しも變るものではない。時間を無駄に費さないで、有効に使用するものは、短命であつても短命ではない。時間を無益に費す人は、長命しても長命したことはない。時間を節して、よく力める人は、短命であつても長命を保つたことと同じであるといへる。

無駄に時間を費さず、而して幸にも五十年の壽命を保つことが出来たとすれば、その人の成した事業は、まづ八十六歳の壽命を保つた人と同じことになる。八十六歳の時間は決して短いものではない。時間と労力とを最も有効に使用するに於ては、何事でも成就しないことはない。何も、早世したからといつて、悲しむことはない。要は、たゞ時間と労力とを無駄に費さないことにある。徒らに年を累ねるばかりが能でもなく、幸福でもなく、または光榮なことでもない。かうした人の生命は、たとへ有形的には長命を保つたとしても、その生命は、事業を成

すといふ上から大觀すれば、既に死んだも同じことである。死んだも同じ心身で、何で世のため益する處などあらう。

無駄の事に一分の時間も費してはならない。無益の事に一片の労力をも盡すことがあつてはならない。すべて自己の一生は、何事にも有効に費すことを忘れてはならない。時間と労力とを經濟的に費すことは、即ち事業を成す根本となるものであつて、これに力めたならば金銭と幸福とは求めなくとも、自然に得られる。金儲けの秘術は、これ以外にない。

6 金儲けの心得

いま、次に金儲けの心得となる大切な要點を列挙して見る。

- 一、何事も無益に費すこと勿れ
- 二、收支を明かにすべし
- 三、克己の精神と正整の習慣とを持続すべし
- 四、金銭の漏口を堅く防げ
- 五、支拂は速かにせよ

六、大は小の積なるを知らざるべからず

七、決して急ぐ勿れ

八、忍耐と勉強とは富を得るの確實安全なる方法なり

九、相場と賭博とは断じてなす勿れ

十、金は活して使へ

十一、借金は多くは其の身を減す

十二、親しき人より金を借る勿れ

これ等の各項を堅く守つて、よく實行するものは、福徳圓滿の長者となることは請合である。だからといつて、人の性、多くは薄弱であつて、行は其の言と一致しないものであるから一時はやつて見ようと奮發して其の氣になつても、直にダレて終ふが、こんなことでは、實に情ないといふより仕方ない。

あゝ貧的！ いやだ、この境界をドウしたら脱けられようかといふものがあつたら、私は其の人に對して、この各項をよく服膺して唯々實踐せよと勸めるものである。

一、何事も無益に費すこと勿れ

「何事も」の三字に注意せよ、人はとかく金のみを、無益に費してはならないと教へるが、私は單に金のみに限らず、一片の勞力も、一分の時間も、紙の屑も、木の片も、或はまた一杯の水も無益に使つてはならないといふのである。何事も無益に費すことが無ければ、金持となることはそんなに至難なことではないのである。

二、收支を明かにすべし

収入と支出とを明かにして、収入の範圍内に於て支出をなさなければいけない。闇雲にどうにかなるだらう主義は、最もいけない。月に一圓づつ足りなくなつても、五十年目には元利積つて三千九百四十四圓四十五錢五厘となる。實に驚くべきことではないか。

一家の經濟などは、我れ關せず焉などと言はずに、入るを計つて出づるを制し、其の按配宜しきに注意しないやうでは、とても國家の經濟などを談ずる資格は無い。磊落だなどと自らそれを氣取つてゐることは、最も悪いことであつて、自分も困らず、また人にも迷惑をかけないでこそ、初めて國家の事に身を致す資格の出来るものと言つてよい。

三、克己の精神と正整の習慣とを持続すべし

まづ、第一に良心の命するまゝを進行して、情のため、慾のために横道に入らないやうに常

日頃心懸けることが肝要である。己を制することの困難なことは、誰も認める所であるが、大に克己の精神を養つて、規律正しい習慣を作らなくてはならない。また、秩序を重んじ事物を整理する考へは、一日も念頭から離してはならない。即ち放埒は最も慎むべきことである。

四、金銭の漏口は堅く防げ

おあしといふが、これはよくいつたものである。この金といふものは兎角逃げたがるものであるから、其の逃げ口はよく閉め切つて防がなくてはならない。少しでも心に油斷があると、水や雪と同じで自然に漏れて無くなる、用心することが大切だ。

五、支拂は速かにせよ

お金があつても、支拂の悪い人があるものだが、これは泥棒根性といふものである。支拂ふべき義務と、支拂ふべき力とを持つてゐるにも拘らず、支拂を難することはいけないことである。支拂ふべきことがあつたら、最も速かにこれを支拂はねばならない。これこそ自己の信用を増す基である。

六、大は小の積なるを知らざるべからず

小さい事だからといつて侮つてはいけない。小は即ち大の基であつて、小さい事をも慎まな

い人は、必ず失敗する。成功などは到底見られるものではない。

小さいことだからといつて、これを棄てゝはならない。神武天皇時代の一厘錢も、若し今日迄利殖したならば、數字では表はせない程の大金となるのである。到底萬や億や兆の桁で數へることは出来ないものだ。

七、決して急ぐ勿れ

これは、ゆる／＼と怠たらず、氣永に勤めるといふことである。コンナ事は誰でも知つてゐることだが、實行しなかつたならば知つてゐないのと同じことである。とにかく急いではならない。絶えず、怠たらず、氣永に道中をすることだ。

八、忍耐と勉強とは富を得るの確實安全なる方法なり

これは當然のことで、別に改めて説明する程のことでもないが、要はたゞ實踐窮行することにある。この實踐窮行といふことはなか／＼困難なことであるが、といつて實行しなかつたならば富者となることは一層至難である。洋の東西を問はず、時の古今を論ぜず、富者となる秘訣はこゝにあるのであつて、ゆめ／＼疑ふやうなことがあつてはならない。

九、相場と賭博とは斷じて爲す勿れ

僥倖を當にして富を得ようなどと考へることは大きな間違ひである。僥倖などといふことは決して得られるものではない。既に射倖心の存する者は、其の人の運命を豫知することが出来る。裏長屋の住居、垢の付いた衣物、口に三度の食事も辛じてと云つたものがとゞのつまりである。また、かの仲買業を見よ、彼等は十年前も今日も大して身代には違ひがない。或は賭博者を見よ、いつも質屋通ひは免れない。

斯うしたことは、斷乎として排撃せねばならない。この忍耐と勇氣がなければ、先づ頼みにもならない人間であることを自覺しなければならぬ。

十、金は活して使へ

至難くいへば、金を生産的に使用することを云ふのである。何の効果も生じないやうな金の使ひ方は死に金使ひといふ。碁に譬へていへば、無駄石を打つのと同じで、無駄石が多ければ其の碁はどれもこれも死んでしまふ。金の使ひ道にも、死活の二法あることを思つて、深く心に注意することが大切である。

十一、借金は多くは其身を減す

金を活して使ふ人が、借金することは少しも差支なく、反つて利益をするものであるが、活

して使ふ腕のない者が借金をする位危険なことではない。それこそ、借金のために其の身を減すやうなものである。たとへ、貸す人があつても、成算がなくては決して借りるものではない。貧しいからといつて金を借るのは卑劣なことである。三度の食を二度に減じても、借金はならぬ。生計の不足を補ふための借金は、返し得る見込がないからである。見込のないに借ることは、既に其の人を倒す心がある。惜むべきである。

十二、親しき人より金を借る勿れ

金は、兎角争ひの種となるものである。人と交誼を永く保たんとするには、決して親しい人から金を借りてはならない。若し返済の出来ない時には、自然と足が遠くなり、果ては多年の情誼も破れるやうなことになる。注意しなければならぬ事だ。

四、貸金法

考へて見ると、金貸の法ぐらゐ至難しいものはない。何だ譯のないことだなどと通り一邊に思つてはいけない。

金を貸すには、先づ其の人を見ることが大切である。正直であるか、勉強家であるか、伶俐

な人かについて、よく観察しなければならぬ。もし正直な人でなかつたならば、約束の期限を守らず、利子も納めず、そればかりではなく元金すら兎角倒され勝ちである。勉強家でないと、其の商賣は常に不繁昌であつて、貸した金もしまひに零になつてしまつて、元も子も返し得る見返がなくなつてしまふ。また恰利でないものは、機を見るの明がないから、借用資本の運用方法が拙い。従つて、豫期した収益を見ることは出来ず、利子も滞り勝となることは免れない。また如何に正直で、如何に勉強家であつても、智なき正直と勉強とは、つまるところ何の効果をも結ばない。

次に、その借金をどう云ふ道に使ふかといふ使途について、見なければならぬ。その使途が正しくなければ、金を貸した甲斐がないばかりでなく、却て其の人のためとはならないものである。使用方法の明言出来ないやうな人には、金を貸してはならない。己の心服することの出来ない仕事に投ずる金であつたならば、寧ろ斷つた方が、後日後悔するやうなことになる。もし、賭博或は相場に使用する金であつたなら、如何に立派な擔保を以て、如何に懇請を極めても決して耳を假してはならない。要は、その使用方法の生産的であるか、どうかについてよく研究することにある。

最後には、その擔保品について見なければならぬ。擔保品は確實であるかどうか、如何なる場合にも滅失するやうな恐はないか、若しあつたとしても、その豫防法は備つてあるかどうか、いつ何時世間に出しても、普通の價格に賣れて行くかどうか、その邊について注意して見ることが肝要である。

信用貸しも、敢て不可だと言はない。もし其の人が突然死ぬとか、不幸にして火災にあふとか、或は病氣に罹つたやうな場合でも、貸した金の損を來さないといふ決着がついた以上は信用貸は甚だよい。併しながら、萬一の時は例外である、其の場合に損をしても已むを得ないなどといふことがあれば、寧ろ斷じて貸してはならない。金貸と慈善とは相異なるものであつて、これを混同してはならない。

泣言をいふ人には、決して金を貸してはならない。泣言をいふやうな人の意志は、薄弱なものであるから、こんな人は成功するものではない。こんな人に金を貸すことは、まづ金を捨てるやうなものである。

金を貸すのは、利息を取るためだとのみ考へてはならない。貸した金のために、世を益するかどうかにも考へる必要がある。世に益しない金の貸方は、決してなしてはいけない。

貸した金は、期日になつて借主が感謝して返しに来るやうにしなければならぬ。借主を喜ばしめ、お蔭で利益を得ましたといはしめる技術がなくては、まだ金貨の上手なものといふことは出来ない。

喧嘩腰で、返金せしめるやうな貸方は、甚だ拙い金貸しである。これはたゞ利息のみを得ればいいといふ考へ方であるからである。

金を貸す上に於ては、決して情誼を容れてはならない。情誼のために金を貸すならば、決して利息などを當にしてはならない。また其の返済期日等も定める必要はない。先方の返し得る時を待つてゐるべきである。もしもの事があつたら、其の金を與へる位の覺悟を持つてゐる必要がある。

而して、利息は高利を貪つてはいけない。高利を厭はずに、金を借るやうな人は甚だ危険な人と見てよく、他に融通のつかない人であつて、こんな人を相手としてはならない。先づ力めて避けた方がよい。

五、何故貯金せねばならぬか

人生僅か五十年、とは昔から言ひ古された語であるが、さて其の僅かの五十年も、所謂人生行路難で、なか／＼難かしいものである。或人が唄つていふのに、

世の中は何の糸瓜と思へども
ぶらりしやらりて暮されもせず

實際、二十年三十年は、經つて見ると雑作もないが、さて、實際生活に關はつて見ると、一年でも二年でも、案外容易なことではない、或時は風に吹かれ、或時は雨に曝され、難行苦行の數々を盡さなければ、安樂の彼岸に達することは出来ない。

しかし、それがこの世の中の常態であるから、如何とも致方がない譯だ。そこで、人には不時といふことがある、病氣もそれだ、天災もそれだ、死亡、失職、失敗、悉く、不時ならざるはない。

金森通倫さんの「貯金のすゝめ」に左の一節がある、よく此の間の消息を道破してゐるからこゝに抜萃する。

人は何故貯金をせねばならぬか、これが第一の問題、まづ此問題を解くと、貯金は自然に出來てくる、人には不時がある、病氣、天災、死亡、かういふ不時の出來事があつた時、他人の

厄介にならず、家族を安全に養ふだけの用意が要る、給料取りは、いつ給料に離れるかも知れぬ、さういふ場合に、少なくとも三年位は、只居ても食へるだけの用意が必要、また主人の死んだ後でも、三年の用意があれば、その内には遺族の自衛も出来てくる、もし全くの不用意で一朝變に出逢つたら、それこそ、ニツチもサツチもいなくなつて、忽ち他人の厄介にならねばならぬ。だから、一家の主人たるものは、豫てより不時に備へる、家族の保険金を用意するの義務がある。

六、三ツ割生活法

私は、かつて七八年前に『食ひはぐれはない』と題して、一場の講話を試みたことがある。その内容は、俸給生活者が、もし職に離れたら、如何に世に處して行かねばならぬかといふことを、私獨特の考へで解決したもので、聊さか参考にならうと思ふから、こゝに概略を採録することゝしよう。

全體、何が心配だというて、食へなくなつては大變だといふこと位、我々の心を痛めることはあるまい、しかしながら、人間が食へなくなることが本當にあるかどうか、それが問題である。お互ひに生れた時は裸體であつた、何も、一生食へる物を積んで、生れて来たのではない。けれども、年々歳々新しく作られる農作物によつて、何年間か生きて来たのは事實である。この事實によつて見ても、全く食へられなくなることはないと思へてよい。怠けてゐて働らかぬ人間は別として、手足を動かし、最善を盡してゐさへすれば、必らずや、食べられるものである。

さう考へれば、別に心配はないが、しかし人には、不時の出来事があつて、どんな都合からして、勤め先を断わられないとも限らない、その時はどうするかといふのが、この講演の主要なる論點である。

私は、こゝに、かういふ方法を提供する。それは、もし其の人が眞面目な人であつたならば必らずや、いくらかの貯金はもつてゐる筈である、また、先方から断わるのだから、退職金の僅かなりとも呉れるであらう、その金を併せて、假に三千圓あるとする、三千圓だけでは、利息を五分と見て、年に百五十圓しか入らない、今まで千圓のくらしをしてゐたとすると、百五十圓では一月にいくらにもならないから、迎も暮らされない。

ところが、その生活程度を下げないで、立派にくらしで行けるのが、この方法の面白いところ

ろである。ではどうするかといふと、三千圓の金の三分の一、即ち、千圓を一年の生活費にする、すると、一年千圓の生活をして居つた人は、矢張り以前の通りの生活が續けて行けるのだから平氣で居られる。

たとへば、子供を學校から慌わて、退げずともよろしい、小さい家へ移轉せずともよろしい、さうしてゐると、世間の人は何といふか、

「あの人は感心だ、職業に放れたら、慌て、大騒ぎでもするかと思ふと、平氣でやつてゐる、餘程金があるんだらう、それならば従前通りにしよう」

というて、米屋も米を持つてくるであらうし、また、その他の物も依然として變りがあるまい、中には、

「あの男は感心だ、それでは一つ事業を持つて行つて相談して見よう」

といつて、事業を持つて相談に来てくれるといふことになる、また、人が欲しいといふ雇主の方からは、

「彼の人は、永年勤めて居つたが、堅い人だから、あゝいふ人を此方へ頼まう、何でも以前の會社では千圓とつて居たのだから、自分の方では千二百圓で来て貰はう」

といふやうなことで、昔より以上の仕事が見付からぬとも限らない、さうして勤めるやうになることも、多からうと考がへる。

さて、一年間は暮らしたが、二年目はどうするかといふと、翌年は二千圓残つてゐる、その三分の一、六百六十圓、利息を入れて彼は七百圓になる。その七百圓を生活費に宛てる。

全體、職に放れて、直ちに生活の程度を下げるといふ事は容易に出来ないが、二年目になつて、千圓を七百圓に落すことは難かしいことではない。しかし、私は、その三百圓も、下げずにやつて行けるといふことを斷言する、何んとなれば、永年正直に勤めて、慰勞金を貰ふやうな人であるならば、世間の信用もあるし、その人の腕も相當にあるから、一年に三百圓や、五百圓は働けぬといふことは決して無い。

従がつて、二年目も矢張り初年と同様に生活程度を下げずに、千圓の生活を續けて行ける。よし自分が働けないうまでも、支出で縮めることも出来ようし、または子供がいくらか働らき得るだらうと思ふ。

では三年目はどうかといふと、同じく殘金の千五百圓の三分の一、即ち五百圓を生活費に宛てる事が出来る。さうしてその不足はどうするかといふと、大抵な品物でも、半値といへば

必らず賣れる、即ち千圓の價値のある人なら、五百圓で勤め口が必らず三年目位にはあるに決まつてゐる、其處で千圓の生活が出来る。

その翌年はといふと、矢張り殘金の三分の一を生活費にすれば、今度は勤め先の月給が殖えて行くから、四年目も同じく千圓の生活が出来ることになる。

さういふ風に、年々送つて行くならば、手許の金は減るかも知れないが、生活の程度は少しも下げずに、何の不安無しに暮らして行ける。さうして最後には、今度の勤め先から取るものだけで、千圓以上の生計費が出るといふことになつて、また再び、いくらづつか貯金の出来る時代が来る。

私は、この方法を稱けて「三ツ割生活法」ともいうてゐる。が、しかし、これは、全然無い金では實行し得られるものではない。如何に上手な手品師でも、種のない手品は使へぬと同様全くの一文無しでは、如何んともすることは出来ない。

そこで、私は、如何なる場合でも、三年間支へ得るだけの貯金は蓄へて居なければならぬといふてゐる。私が三年間貯金を唱導しつゝ、實行を勧めてゐるのも、畢竟此の意味からである。

七、貯金の三徳

1 貯金の幸福

さて、然らば貯金實行後の効果は果してどうかといふに、私は「貯金に三徳あり」と答へようと思ふ。

併し、三徳とはいへ、決して「貯金の効能」は三徳や十徳ではない。或は數へて見たら百徳千徳があらうと信ずる、が、こゝにいふ三徳なるものは、貯金といふ物質そのものによつて、直接利益を得るところのものではなく、間接に受くるところの利益なのである。

けれども、この間接の利益なるものは、却つて、直接受くるところの貯金の効能より、より以上の幸福を我々の人生に齎すものである。これがため、私は殊に貯金の三徳としてこゝに擧げたのである。

前項に掲ぐる、天災其他の場合に、貯金によつて助けられたといふが如きは、誰でも認むるところであり、また誰でもが承知のことであつて、貯金の徳として擧げるには、寧ろ、當然す

では何故貯金をすれば健康になるのかといへば、それも極めて簡単である。例へば、貯金を初める、その貯金は初めにいふが如く、必らず永續性のものでなければいけないのだから、その人は、絶えず貯金をするがために、活動を続けなければならぬ、活動を続ければ、イヤでもその人の身体は健康にならざるを得ないのである。このことは、私自身に於て経験もしてゐるが、私の経営してゐる銀行の従業者について見ても、ヤハリその効果が明らかに解るのである。實に不思議千萬な事實だ。

尤とも、かつて、私がニコニコ主義を唱導しつゝある頃、ある醫學者の話しに、すべて世に處するに、樂觀をして、愉快に活動をすれば、我々の血液の一分子であるオスフォニンといふものが増すといふて教へられた。オスフォニンは人間の活動力の原子で、このオスフォニンが多量にあればあるほど、いよゝゝ愉快に活動ができるのださうである。だからオスフォニンを増加させようとするには、愉快に絶えず活動するに限るのである、しかし人は何等目的なしに活動は出来ぬものだ。そこで、どうしてもやらねばならぬといふ貯金を目標にして、毎日に愉快に活動を続けるのである。たとへば、何年後には、此の貯金が何千圓になる、何萬圓になる、さうすれば、他人を頼ること無しに、現在の職業に離れても何の心配はない、この商賣に

ざる程の當然であるが、こゝにいふ「貯金の三徳」なるものは、全くそれ以外のものであつて却つて諸君は意外の感に打たるゝであらうと思ふ。

然らば、その三徳とは何か、私はいふ。

第一、貯金をすれば身體健康である。

第二、貯金をすれば家庭圓滿である。

第三、貯金をすれば商賣繁昌。

諸君笑ふ勿れ、何で貯金をすれば身體が健康か、何で貯金をすれば家庭が圓滿か、それは以下説くところの各項によつて首肯せらるゝであらう。

1 貯金をすれば身體健康

何故第一にこの項を擧げたかといへば、我々人生に健康程大切なものはないからである。西洋の諺にも「健康は幸福の母」といつてゐる。實にその通りで、この世に生れ出でて不健康でくらすならば、全く以て、我々の人生も何の意義をもなさぬと考へる。健康であつてこそ初めて、樂しさがあつて、喜びがあり、面白さがあるのである。

失敗しても、何等後顧の憂ひが無い、また其の貯金によつて、社會事業でも起して見よう、とか、人各自の希望に生きて、突貫して行かれるのである。かうすれば、即ち絶えざる緊張と絶えざる活動によつて、愈々益々身體は健康にならざるを得ない。これ何式の健康法にもよらずまた何等の藥物を用ひずして、こゝに立派な保健術の目的が達成せられるのである。

3 貯金をすれば家庭圓滿

さて、健康の次に來るのが何かといへば、「貯金をすれば家庭圓滿」である。このことは、殆んど説明を要するまでもなく、解り切つたことであるとは思ふが、一通りこゝに説明する。

凡そ家庭の不圓滿程、我々の心を腐らすものはあるまい。「家庭は人生の安息所なり」とは古人の金言であるが、その家庭が冷たく、「秋風や夫婦黙つて飯を食ふ」といふが如く、冷たい風が家内中に吹き荒んでは、この位ぬる人生もつまらぬものはなからう。

家庭不圓滿の原因はといへば、生活難から來るのである。

貧窮の極、夫婦別れもせねばならなくなる、親子別々に居なければならなくなる。

また或場合には、主人の放蕩から、さういふ悲しい結果を生む家庭もある。どちらも、確か

に、家庭の圓滿を破壊する、これが筋道なのである。しかるに、こゝに、貯金といふ目標を立て、それに猛進すれば、現在は貧窮でも、追々、富裕に向つて行く、これ第一。

また、貯金を一定の年限に續けて行かうとするには、毎日の活動を我々に要求するから、時間にして居る暇がなくなるのだ。また一面には、金に於ても餘裕がなくなるのであるから、時と金が許さぬため放蕩は出來ない、これ第二。

眞面目に主人が働らいてゐれば、奥さんの方でもよく働き誠心から仕へざるを得ないといふことになつて、これはイヤでも應でも家庭は圓滿になる筈である。

4 貯金をすれば商賣繁昌

第三が商賣繁昌で、いふまでもなく、第一に身體が健康で第二に家庭が圓滿であれば、商賣熱心に稼ぐから、自ら商賣が繁昌することは當然である。この三者は環のやうに輪をなし、いづれに行くも端はないのである。これを逆にしても、貯金をするから商賣に熱心であり、眞面目である。眞面目であるから、身體も健康である。家庭も圓滿であるといふことになる。で

あるからこの三者は一つであつて、その一つは「貯金」を出発点として解決される問題なのである。實に簡單明瞭で、私はこれを稱して「貯金の三徳」といつて居る。

八、どうすれば貯金が出来るか

貯金の必要が如何なる場合に起るものか、また貯金をしたら果して、どういふ効能があるものか、といふことについて説述したのであるが、然らば、今度は猶一步進んで「どうすれば貯金が出来るといふか」といふ問題に説き及ぼうと思ふ。

1 消極的貯金法

抑、貯金には、消極的貯金法と積極的貯金法との二種がある、この二つは、恰かも車の兩輪の如く、二者相離るべからざるもので、もし、誤まつて、何れか一方のみに偏すれば、完全な貯蓄は行なはれないのである。

しからば、先づ消極的貯金法とは、如何なることをいふかといへば、これを稱して、俗に、「搾り出し貯金法」といふ。

こゝに、その一例を擧げていふならば、

私共日常の生活上から、出来るだけの必要な物を省き、それを金にして積むのであるが、たとへば、今夜用事があつて、何處まで行かねばならぬとする。圓タクで行けば七十錢とられるが、電車で行つても、別に差支へないところだ。だから、往復一圓四十錢の所を、往復十四錢の電車で済ませる。すると其處に、一圓二十六錢といふ餘りが出る。そのあまりの金を、直ちに貯金として積むのである。

また、帽子を買ひに行く、十圓の帽子にしたいと思ふが、どうも勿體ない氣がするから、五圓の間合せる、そこで五圓の餘りが出るから貯金にする。殊に、煙草を喫む人などにとつては、可成りよい搾り出しの材料がある。

今まで一箱十五錢の朝日を喫うてゐたが、それを十錢の物に値下げをする。一日に二箱買ふとすれば、そこに十錢の餘りが出る、一日に十錢は何でもないやうだが、さて一月とたまり、一年と積つたら大きなものになる等々の類である。

こゝに斷わつて置きたいことは、如何に消費の節約でも當然必要なものまで、約めろといふのではない、それでは、節約でなくて、吝嗇である。どうもこの節約と、吝嗇との間の區別が

つきにくいと見えて、時々、誤まつた方法を實行してゐるのを見るが、甚だ残念な事である。このことについては、後段に「眞の生活程度とは」と題して述べるからこゝには省略することとする。

2 積極的貯金法

私のいふ積極的貯金法とは、例へていへば、こゝに、一時間働らけば、一回取れる人があるとする、その人の生活は、一日五圓かゝるから、五時間働らけば、即ち、その日暮し一ぱいの生活が出来ることになる。ところが、感心なことに、この人は一日六時間働らく、だから、毎日一圓の剰餘金が出て来るので一月續けると、三十圓の貯金が出来た。まづ不時の用意はこれによつて出来ようといふものである。

しかるに、私のいふ積極的貯金法は、これに輪をかけて働らけと命ずる。つまり一日六時間働らけば一日一圓づつ貯金が出来るとするならば、それ以上また一時間でも一時間半でも働らく、さうして、より以上の勞銀を得て、それを他日の爲めに備へる、所謂、さういふ風に積極的に骨を折つて貯金をする、これを積極的貯金法といふ。一名、産み出し貯金とも稱へる。

消極的は消費の節約によつて、金を搾り出すのだが、積極的は極力働いて、金を得て、それを溜めるのである。一方を女性的とすれば、一方を男性的といへる、ドチラもなくてならぬ貯金法だ。

僅かに、一日に一時間の差でも後に大へんな差がある。しかるに人間の一生は短かしいへども、一年は三百六十五日である、十年は三千六百五十日である、人の働らきざかりを二十年と見ても、七千三百日ある、七千三百日善用したら、一體どんなことになるだらうか、到底ソロバンの桁では出て来ない程の大きな利益が湧いて来ると思ふ。

諸君、一日の善用も、その結果は實に恐るべきものではないか。

一體、世の中で成功してゐる人も、成功しない人も、別に一日の時間には變りがないのである、成功者の一日が二十八時間で、不成功者の一日の時間が十時間ではないのである、同じく二十四時間は二十四時間で、三度の飯を食うてゐるに過ぎない、こゝが、成功不成功の岐るところである。

九、眞の生活程度とは

ならば、それこそ病氣死亡天災等のことが起つても、その他の災難に遭ふといへども、ピクともしない所謂不動の状態になるのである、だから、其處で初めて安心が出来るのであるが、全然其の日暮しをして居るならば、到庭それは何百年経つともそれは望めないことなのである。けれども、この教へによらず、身分以上にくらすものは、それを贅澤といひ、また極度に身分以下にくらすものがあるならば、それを吝嗇といふのである。この事は餘程、我々は日常に心しなければいけないのだ。

要するに身分不相應なことをするのがよくない。自家用の自動車で、走り廻つてゐる人もあらう。しかしそれは、贅澤で乗つてゐるのではないのかも知れぬ。先から先へと、用事があつて、その用務を果すには、どうしても自動車によらねばならぬのかも知れぬ、もしくはまた、その人は、自動車にのることが、普通の人の電車よりも猶相當であるのかも知れぬ。殊に、目の成功のみを見てゐるから解らぬが、自動車に乗るまでの、その人の苦心は、一朝一夕ではなかつたかも知れぬ。またこれと反對に金持が貧乏人の眞似を、一から十までしてゐるならばそれを吝嗇と言ふ、これも誠によくないことだ。

經濟の原則に従へば、需要があつて、供給があるので、もし金持にして、貧乏人と何等異なる

勤儉貯蓄を履き違へると吝嗇になる。だから、このことは餘り獎勵は出来ぬ、といふ人があつて、かういふ議論は甚だ奇怪な譯で、私共は義理にも御尤ともとはいへないのである。

では、我々がこの世に處するに、どうしたらよいかといへば、難かしい學問的なことは省き手取早くいへば、

「人各自其分に應じて生活する」

といふことである。至極簡單である。

が、さて、しからば、どの位々の程度を以て身分相應といふかといへば、それが、チト面倒で、其の人々の、収入と地位と、家族の多少、その外いろ／＼な事情によつて異なつては來るが、大體に於て、私は、

収入の一分以上は必ず貯蓄にせよ。

といふものである。たとへば、毎日五圓の日當に當る人ならば、その一分の五十錢を貯蓄するのである。十圓の人ならば、一圓を蓄へるのである。

一分を差引いて残つた金でその日の生計を營なれば、十日にして一日分の餘裕を生み、百日にして十日分の餘裕を生むのである、かくの如くして三年五年、或は十年二十年と積んで行く

ることなく、絶対に金を死蔵してゐるならば、それは恰も無きに等しきもので、金持とはいへぬのである。

さらばというて、俺は金持だ、何でもしてよいと考へては困る。如何に自分の金だからというて、それを悪用すると、善良なる風俗を紊すことになる。これ即ち悪事なのである。人間と生れて、悪事はすべきでないことは、金持も貧乏人も、同じことである。殊に、無くてもよい寶石を身體中にピカ／＼させたり、あらでもと思ふ、洋酒をボン／＼抜いて、滅茶々に呑んだりするのは、愚の骨頂といはねばならぬ。

元來、さういふことは、たとひ、金持が行なつても、貧乏人が行なつても、誰が行なつても貧乏なこと、要するに、そのことによつて、我々の生活の實質は、何等良くはならないのである。だから奢侈であり、贅澤であるといへる。

この身分相應の生活といふことを、つまり「合理的な生活法」とでもいほうか、また、或意味においては、文化的な生活ともいふものである。

要するに、金持は、貧乏人の如き生活をしてはならない。たゞ、金を悪用せぬやうに、身を慎んで善用されたい。また、貧乏人は、勤儉努力して、貯蓄し、然して、生活の向上發展を

期して貰ひたい。

以上の理窟を、もう一層砕いていへば、十の收入に對して、十を費やしてはいけないといふ事である。八、若くは七にして、残りの二乃至三は、後の爲めに貯蓄せよといふのである。

一〇、貯金に時なし

或人はいふ「不景氣だから貯金は逆も出来ませぬ」と。

また或人はいふ「どうも景氣は好いが貯金する金はない、借金も返さねばならず、また買物もせねばならず」と。いや、何れも誠に立派なお心懸けと申さねばならぬが、さて私から言はせると、イヤハヤ、誠に不心得千萬なお方々だといひたくなる。なぜならば、第一、不景氣だから貯金が出来ぬ、といふのが大きな心得違ひである。不景氣であればこそ、貯金が必要なのではあるまいか。

諸君、不景氣の時、金廻りのよくないことは、世間普通である。けれども、貯金が出来ないといふことの遁辭にはならないのだ。

さて、景氣が好くて貯金が出来ぬといふのは、これこそ、不景氣で出来ぬといふよりは、猶

一層奇怪な譯である。景氣の好いときに、そんな口實を設けて、成るべく貯金をしないやうな算段をするから、結局不景氣風が吹いて来ると、直ぐに頭痛鉢巻で、ウン／＼いひながら、大切な電話までも賣りたいといふのだ。飛んだ不心得といはざるをえない。

私は景氣の好いときこそ、思はぬ儲けもあるのであるから、所謂「勝つて兜の緒をしめよ」昔家康は小牧山の戦ひに勝つたが、決して追撃をしなかつた、これを見て老臣が「何故追撃しないのですか」と聞くと「後日の爲めに備へたいからだ」といつた。さすがに家康は名將であつた。だから、さういふ時こそ腹帯をキユツと締めて、少し大口の貯金を初めて置かねばいかぬと説くものである。

しかるに、どういふものか、景氣の好いときは、往々にして貯金の出来ぬ輩が多くあるのである。

これを金森さんに言はせると「大漁後の借金残り」というてゐられる。成程面白い言葉で、たとへば、大漁で金が儲かるので、思はずその景氣に浮かれて、餘計な金を使ふのである。だから、入つて来る金よりは、出る金の方が超過して、其處に借金が残るのである。

一一、貯金に必要な三條件

世の中には、全く空漠の間に成し得らるゝものは一つもない。僅かに道を歩くにしてからが、さうである。一體、俺は何處へ行くのが目的であるか、それには、どういふ道を通つて行くか、行つてから何をするか、かう考へて、家を出たに違ひない。さうして、戸外へ出て見ると、知つて居る人に打付つて、道草を食うてゐたゝめに、先方へ着く時間が後れたりする。また、途中で自動車や電車に故障が出来たりして、思はぬ手間をとる。それでも、漸く目的地に着いて見ると、會はうと思つた人が生憎不在であつたりする。かういふことは、私共の日常生活には、殆ど毎日のやうに繰返されることで敢て稀しいことではないが、さて、貯金をするにしても、ヤハリ、それに對する、いろ／＼の目標といふものを定めなければいけない。でないとも目的なしに漕ぎ出したボートのやうなもので、何處へ行つて何をするのかさへ分らぬから、行くところに忽ち迷ふといふことになる。それではいけない。そこで私は、貯金をするに、三つの必要條件といふものをこゝにかぞへあげたのである。

では、其の三つの條件とは如何なることかといふと、先づ、

第一が、數の觀念を養成すること。

第二が、必らず目的を貫ぬくこと。

第三が、安全なる金庫を求めること。

この三條件の内たつた一つの條件が缺けても、完全な貯金は出来ないものである。碎いていへば、第一によつて、貯金の大切なこと、また、かくも驚くべき數に達するものかといふことを知り、第二によつて、克己精勵、飽までも奮闘努力して、目的に向つて猛進すること、しかし、石の上にも三年の眞精神によつて、辛抱すること、第三には、如何に貯蓄心があつて、辛抱して貯金を續けて見たところで、それを保管する場所が當を得てゐなかつたら、これ恰かも土龍の穴に水を注ぐやうなもので、いくら一生懸命に注ぎ込んでも、殆んど底知らずに抜けて行つて了ふものであるから、如何に永い間辛抱しても、それは悉く徒勞となり、水泡に歸するのである。だから此の三つの條件は、必らず備へてゐなければならぬものである。

然らば、この三條件を完備させるには、どうすればよいか、といへば、それには種々な注意を要する。所謂、前に述べた外出のとき、目的地へ行くのと同じことで、同じ電車に乗るとしても、空いて居るのに乗るにはどうすればよいか、また、何處の停留所が目的に一番近いのか、

さうして、一回の乗換で済むか、それとも二回にするか、たつた一つの電車に乗るのでさへ、それだけの注意は必要である。まして、大切な、汗と膏の結晶である金を溜めるのであるから種々の注意を要すること勿論である。

世間往々にして、第三の條件に不注意の爲めに、不正貯蓄銀行や、或ひは不正利殖會社などに惑はされて、折角溜めた金を溝へ捨てることがある、これ、第三の條件に餘りに無頓着の故から起るあやまちで、甚だお氣の毒に堪へないことだが、亦已むを得ない譯である。

以下説くところの各項は、殆んど、それに對する注意の數々であるので、大いに戒心張目して讀んで貰ひたいのである。

1 驚くべき貯金の積數

二二二が四、とは小學第一年において、我々が習つた數であるが、何十年と経た今日に至つても、ヤハリ二二二が五にはならない、さりとて二二二が三とも、教へて居らぬやうである。して見れば、二二二は何處まで行つても四の數であることは、疑ふ餘地がない筈である、即ち永久のこれが眞理なのである。

さて、二二二が四、二二二六が永久の眞理であるならば、我々は、何處までもこの九九によつて進んで行かねばならぬ、であるとするとすれば、五圓の收入に對して、五圓の支出が伴なば、残は零であるのは、明らかであり、これ又、永久の眞理なのである。さあそこで私は、前にも述べた如く、貯金を始むるにはどうしても、漸を逐うて、積んで行くよりほかに手段はないと考へる。例へば、五圓働らいた人が、一割づつ毎日積むならば、その人は一ヶ月に十五圓を積んだ勘定になる、もし二割の一圓づつを積んで行くならば、一ヶ月に三十圓になる一ヶ月十五圓や三十圓では、ホンの僅かに聞えるが、これを五年十年と積つたら、それこそ驚くべき數になる。

例へば一日一圓づつ貯金をすれば、一ヶ月三十圓になるが、それを人間の活動期間の三十年間續けたら、どういふ數になるかといへば、かういふ數字が出る。(但し年五分の複利)

三年後	一千六百四十四圓三十一錢
五年後	二千六十三圓四十八錢
六年后	二千五百五十四圓五十六錢
七年后	三千七十五圓五十三錢

八年后	三千六百二十八圓二十二錢
九年后	四千二百十四圓五十九錢
十年後	四千八百三十六圓六十五錢
十五年後	八千五百六十三圓五十七錢
二十年后	一萬三千五百七十二圓二十一錢
二十五年後	二萬百三圓四十二錢
三十年後	二萬九千三百四十九圓六十一錢

かくの如く三十年後には巨額な金になる。しかしてその元金はといへば僅かに一萬八百圓であるに拘はらず、利息は一萬八千五百四十九圓六十一錢になつてゐる、一日一圓の少額もかく積つて見ると、實に大きなものではないか、だから、一錢の些といへども、ムダが出来ないのだ。僅かに一錢と一口にいふが、たとひ一錢でも不足をすれば千萬金といへども世間に通用はせぬものである。

たとへば、十萬圓の土地を買うた。しかし惜しいかな、九萬九千九百九十九圓九十九錢はあるが、何としても一錢不足をしてゐるといふときに、それが直ちに十萬圓として通用するかと

うか、成程、それは十萬圓に對する僅かに一錢であるから、民間の取引なら、何とか話しも付かうが、それにしてからが、一應は斷わりをいはねばならぬ、まして政府に對する金であつたら、たとひ一錢不足をしても十萬圓の通用はしないのである、九萬九千九百九十九圓九十九錢は、何處まで行つても九萬九千九百九十九圓九十九錢なのである、それだから一錢でも大切なのである。

よく、一錢ばかり仕方がないといつて、投げ出して置くが、イザとなると、一錢が五厘でもなければ通用出来ないのだ。ことに電車汽車に乗る時など、生憎一錢の金がないために、切符が買へないで、電車を途中で降ろされて、仕方がなしに、要りもせぬ買ひ物をして、漸く一錢の金をこしらへて、電車に乗ることなどがある。また、汽車でも、剩錢がないために、たつた一錢あれば間に合ふのに、それがないために汽車に乗りおくれた、といふこともあるだらう。一錢の大切な事はその通りで、ハガキ二枚買ふには、三錢なければいけない。しかるに、二錢では、何處へ行つても一枚しか買へないのだ。

かくの如く考へて來ると、一錢の微といへども、實にゆるがせには出来ない。殊に、利息といふ點などからみても、この一錢は、なか／＼重大なものなのである。例へば

百圓について、日歩一錢といふのと、二錢といふのでは、大した違ひが出る。成程、それは、たつた百圓といふ觀念から考へるから小さいが、私共巨額な金を預金者方から預かつて居るが、この一錢の違ひが、大したものになるのである。

2 石の上にも三年

私は幼いときに或人からかういふ道歌のやうなものを聞かされた。

金といふ字を解剖すれば、人ニハ——が第一よ

鳥渡、どういふのか初めはわからなかつたが、小學校に入學して、金といふ字を書くやうになつて、初めて判然と解釋が出来た。成程、つまらぬことのやうであるが、なか／＼昔の人は面白いことをいうたもので、何事にも辛抱は大切であるが、殊に、金には、辛抱が第一であることは、今更いふまでもない位だ。

一口に辛抱といふが、この辛抱の辛いことは、却々容易なことではない、しかし、何をすることも何になるにも、この辛抱の洗禮を受け、しかしてこの門を潜つて來なければ成功の域には出られないのである。

私が曾て、ニコ／＼主義を唱へた頃「石の上にも三年」と題して、雑誌ニコ／＼に一文を草して載せたことがある、聊さか参考にならうから茲に採録する。

少くも三年間、石の上に坐つた積りで辛抱すれば、大概の事は成就するものである。もし成就せないとすれば、それは石の上に坐つたのでなく、綿の上に坐つたに違ひない。綿の上では何年でも坐つて居らるゝ、辛抱といふ程のものでない。誰にも出来る辛抱は、所謂ホントの辛抱にあらず、同じ三年でも、石の上の三年でなければならぬ。試みに石の上に、半日でも坐つて見よ、足が痛くなつてたまつたものでない。それを三年間やるといふのであるから、餘程の難事である。難事なればこそ面白味がある。誰にも容易に出来ないところに價値がある。成功は困難を突破して、初めて得らるゝもの、艱難汝を玉にすといふのである。

私は、正に人間には辛抱が第一であると考へてゐる。しかし、その辛抱も、意志が弱くては持続出来ないのだから、意志を強くして、さうして、克己の精神を養ひ、つひに成功の域に達せねばならぬと思ふのである。

3 利殖としての貯金

貯金の本質としては、何としても金を有利に廻さねばならぬ、といふのではない。飽までも安全確實に保管して置き、イザといふ場合、直ちに引出して、その目的に使用し得らるゝのではないと、完全なる貯蓄とはいへないのであるが、しかし、又一面に於ては、利殖といふことも全然度外視することは出来ぬ。

前項に於て「安全なる利殖の研究」の記事中、利廻りの安いところが即ち安全なのである、と述べてゐるが、しからば、如何なるために利廻りが安いのが安全であるかといふことについて少しく説明しよう。

尤も事實は、このことを雄辯に物語つてゐるのは、現在、世間で第一流と稱せられつゝある大銀行の預金と、二流三流と目せらるゝ銀行の預金と比較して見ると、直ちに首肯され得るのである。御覽なさい、一流の銀行の利息は、二流銀行の利息より必らず安いのであつて、その安い一流銀行の方に預金が多く集まるといふのが何よりの證據である。水は低きにつくといふ古言もあるが、實にその如くで、世間の人は、よく盲千人といふが、決してさうではないのである。確に目明は千人以上居るに違ひない。

また、それと反對に、所謂、二三流にもないもぐりの金融會社、不正手段の會社は、新聞に

堂々と廣告して曰く「吾社は二割に利殖す」などと吹聴してゐる、この位の危険なものはないのである。

私は、いつも「利殖の高いといふことは、危険であるぞ」といふ信號を掲げてゐるに等しいものである、というて行員を警戒してゐるが、實にこれ位の危険千萬なことはないのである。しかるに、所謂、世間には、全然かういふ方面には無経験な、無知識な人が往々あつて、随分大切な金を預けて、後にはつひに一文も取れなくなり、仕方がなしにその筋へ訴へて出るものがある。最早、さうなつては後の祭、六菖十菊で、警視廳から檢舉の手が出て見たところで無いものは無い。訴訟しても費用倒れで、ヤハリ取れないものは取れない。つひに大切な金を無くした上に、世間から胡廬の種になる。こんな馬鹿々々しい話しはまたと世間にない筈である。

けれども、よくよく考へて見ると、これは引ツ掛る方にも、よくない所がある。不注意な所がある、何故ならば、大切な貯金を保管して貰ふ、といふことの本質を忘れて、いくらでも餘計な利息を獲らうとするから、その良にかゝるのである。

米國のメカニックス貯蓄銀行の廣告を見ると、大きな魚が、釣にかゝつて、水面に引つぱり

あげられてゐる畫が描いてある、其れに、こんな振つた文句が付いてゐる。

あはれな魚よ！

曖昧な提案によつて釣らるゝ勿れ。

貴方が凡てを知つて居ないところへ貴方の金を預け入れる勿れ。

投機を爲す勿れ、金はその方法では得られるものではないから。

機會を捉へる人。といつても實は何も策があるのではない。

可成り皮肉であるが、確に、これある哉といひたい。

一一一、最後は實行

さて、貯金の爲さざるべからざることとは、以上の説明で百も御承知になつたことであらうしまた、いかにすれば、最も確實に、且つ有利に貯金し得らるゝか、といふことも了解せられたであらう。しかして、こゝに餘すところの問題は、たつた一つの實行のみである。

諸君、畫いた餅は口には入らぬものだ、何年見て居ても、腹は充くならない。諸君、私は、貯金を人に勧めるとき、かういふ歌を聞かしてゐる、否、歌といふよりは私共の銀行の、これ

が一つの標語となつてゐる。曰く

貯はへは人間萬事の基なり

悟りし時は明日とのばすな

諸君、百千の議論より一ツの實行とは、昔からの諺である。

成せば成る成さねば成らぬ成るものを

成さぬが多き人の世の中

成る成らざるは、實に諸君の心懸け一つなのである。

成らざるにあらず成さざるなり

と古人は、いろ／＼に人間のするい氣持を喝破してゐる。如何に名論卓説も、實行せねば、

畫ける餅に等しいものだ。

以上説くところのものは、多く私の永い間の經驗に基いたものであつて、一つとして實行不可能の理想論や、空想論は交へてゐないのである。即ち、成る成らざるは諸君の實行不實行にあるのだ。無論、私の議論は決して名論でもなく、卓説でもない、極めて平凡な議論である、従がつて、世間の人の誰でもが實行し得る所のものであることは請合ひである。(終)

◇編輯だより◇

◇著者牧野元次郎氏は、言ふまでもなく、日本の貯金王として知られる不動貯金銀行の頭取であつて、世に所謂ニコ／＼貯金の創始者である。

◇東洋人は、金とか蓄財とかいふと、頭から嫌ふが、金を人間生活と結び付けて考へる時、重大なる問題である。特に氏に乞ふて本書を公刊したわけである。

◇高橋是清翁著「半生の體驗」は各方面より御好評をうけ非常な人氣であります。

◇藤原銀次郎氏の「産業日本の進路」は日本の經濟的進路の方向を指示したものととして、激賞をうけて居ります。

◇近く「政權は誰が動かすか」出版。日本政界の内幕を書いたもので、政界多事の折柄、問題の書であります。

◇パンフレットは毎月三冊發行、直接購讀を希望せらるゝ方は、ハガキで本社へ御申込下さい。

◇新刊通知を希望せらるゝ方は、ハガキで住所姓名を御しらせ下さい。

人生金儲け修業

(No. 43)

定價十錢

昭和十一年二月十六日 印刷
昭和十一年二月二十日 發行

著者 牧野元次郎

發行兼 印刷人 伊藤隆文

印刷所 三陽堂青野印刷所

發行所 今日の問題社

東京市芝區田村町四丁目十八番地
電話芝(43)三〇〇七番
振替東京五九七四八番

東京鐵道局公認 鐵道保養會(鐵道各線ホームス)

鐵道弘濟會・鐵道投産會

森田書房・富章新聞店

啓徳社・上田屋

新正堂(京阪神一手販)

川瀬書店(名古屋)

大取次

◇目書行刊社題問の日今◇

古次郎著	澤海軍豫備會商決烈せば?	價一〇	熊翁著	時運に乗る法	價二〇
清明著	近代國防とソヴェート・ロシア	價一〇	眞喜著	田一木福相牧野内府の借胃思想を糾弾す	價一〇
陸軍省編	經濟戰略・思想戰略	價一〇	芳松著	下軍部を裏から覗く	價一〇
陸軍省編	政局はどう動く?	價一〇	國防編	列強は如何にして支那を食ふか	價一〇
松造著	山農村はどうなる?	價一〇	小男著	林軍部の系派・動向(絶版)	價一〇
二郎著	インフレーション下の金融財政はどうなる?	價一〇	住男著	橋處世一家言	價一〇
高吉著	五・五・三廢棄をめぐる列國の動向を探る(絶版)	價一〇	是清著	東京附近夏山の旅	價一〇
阿夫著	重壓下の日本と國防の強化	價一〇	藤道著	投資・利殖の必携	價一〇
陸軍省編	羅シアは如何にして極東に迫るか	價一〇	野田著	豊太閣の處世術	價一〇
陸軍省編	内閣審議會とは何をやる所か	價一〇	永造著	林銑十郎と眞崎甚三郎	價一〇
阿治著	天皇機關説を爆發して	價一〇	松男著	重臣プロツクの正體	價一〇
眞喜著	國民に訴ふ	價一〇	金太郎著	日本憲法の精神	價一〇
永造著	滿洲國皇帝を語る	價一〇	節雄著	陸軍の智腦九人男	價一〇
松男著	軍部前線に躍る人々	價一〇	芳松著	川島義之と渡邊錠太郎	價一〇
野田著	株式界の前途	價一〇	小一郎著	林軍部と國體明徴問題	價一〇
補公編	密寶大補公の遺訓書	價一〇	小治著	ジャクソン式強體健康法	價一〇

◇目書行刊社題問の日今◇

三夫著	島制裁下のムツソリニ没落か	價一〇	牧次郎著	野人生金儲け修業	價一〇
松男著	荒木貞夫と阿部信行	價一〇	高馬編	永田事件の公判記録	價一〇
片倉著	日本はイタリイを支持して	價一〇			
藤次郎著	英米の壓迫に備へよ	價一〇			
長谷川著	裏から見た歐洲の外交戰	價一〇			
了郎著	北支獨立運動の真相	價一〇			
林造著	政局線に於ける軍部の動き	價一〇			
天造著	蔣政權の行方と迫れる日英戰爭	價一〇			
郷十著	外交陣をめぐる軍部と外務省	價一〇			
久之助著	國體宣揚と重臣プロツク	價一〇			
房之助著	サラリーマンは何處へ行く?	價一〇			
三夫著	日支衝突必然論	價一〇			
石吉著	山金の持論	價一〇			
高吉著	生體の體験	價一〇			
藤次郎著	産業日本の進路	價一〇			
銀次郎著	軍部・官僚・政黨	價一〇			
野太郎著	軍部・官僚・政黨	價一〇			
奈路著	良どうすれば選挙違反にならないか	價一〇			

◎既刊書御注文は、すべて前金にて御願ひ致します。御申込は本社直接又は最寄賣店へ。
送金は振替又は郵便切手のこと。

武 小 路 實 篤 著

牧 野 元 次 郎

果然!! 暴風的賣行き!! 人氣沸騰!!
四十版を賣り盡して増刷又増刷!

本書は銀行界の巨人にして、財界を獨住する牧野元次郎氏が、身を以て示した處世修養の教科書だ。南總の貧乏士族に生れた氏が、如何にして、僅か三十五年間に預金五億を擁する不動貯金銀行を築き上げたか! 其の辛慘苦衷は、文豪武者小路氏の麗筆によつて綴られ、生きた人生訓、處世の鐵則として、何人もが一讀三思すべき書である。

本書一たび世に出づるや、藤原銀次郎氏、石山賢吉氏をはじめ、各方面より本書を激賞推薦せられ、申込殺到して、出版界の記録的賣行を示した。

四六版總ルビ付、箱入
四百頁金銀箔頗る美麗

定價一圓八十錢 (送料十四錢)

東京市銀座八區 學藝社 振替五九四五番 東京五番

管原節雄著 新刊

定價十錢 (送料二錢)

政權は誰が動かすか

日本政界の内幕
政界の裏面に躍る策士
次期政權を覗ふ巨頭連

憲政の常道だとか、強力内閣、舉國一致などと言ふけれど、一たび政界の裏面に入つて見れば、政權をめぐつて行はれる策動、暗闘、カケ引、等々、全く吾人の眼を掩はしむものがある。權慾を中心として、繰りひろげらるゝ政權繪巻物こそ、國民がよく見ておくべきである。

本書は、現下日本の政界の内幕を赤裸々に書いたもので、本書中に登場する有名無名の政客、策士、浪人、群をなして、醜觀、壯觀を呈してゐる。

東京市芝區田村町四十八番 今問題の社 振替五九四五番 東京五番

社団法人 同盟通信社 高雄辰馬編録

特價二十錢 (送料二錢)

永田事件公判記録

一世の注目をひいて、其の成行如何によつては重大なる結果を惹起するやもしれないと傳へられてゐる古今未曾有歴史的な大事件たる永田鐵山中將刺殺事件を裁く、相澤中佐の公判は、今や、其の緊張の頂點に達してゐる。事件の真相に至つては、到底新聞紙によつては傳へられるべくもない。しかも本事件の真相こそ、國民が窺知して、公正なる批判の下に將來に善處しなければならぬものである。

なぜ此の大事件が起されたか。 其の真相と全貌を知らんとする者は本書の公判記録を見よ！ 特に同盟通信社の厚意によつて、公判に各新聞社を代表して立合つてゐる同社の記者高雄氏が、公判記録を集録して一冊となし、何人にも判るやうに編輯して、希望者に頒布することゝなつた。目下申込殺到しつゝあり、品切れにならぬうちに、即刻申込まれよ！

今日の問題 社 振替東京東芝區田村町四十八番

終

